

【レジュメ】

## 「みな神様之銭 神様すえの為 御さしむけ」ということについての一考察

姫野教善

「みな神様之銭 神様すえの為 御さしむけ」という神の言葉が、一体、どのような意味をもつものとして理解されなければならないのであろうか。この神の言葉が、一体、何のために発せられたのであろうか。

貨幣（金銭）が、すべて「神様之銭」とは、一体、どういうことであろうか。その理由とは、一体、何か。

本稿は、この問題を、理論的に分析し論究しようと試みたものにほかならない。

貨幣（金銭）が、「みな神様之銭」として、「神様」が「すえの為」「御さしむけ」になったという神の言葉、そして、この「御さしむけ」によって、「金神様御かけて立ちゆき」という、貨幣（金銭）が生み出した人間の難儀の問題、これが神のおかげによって救い助け出される救済世界の出現、換言すれば、貨幣（金銭）そのものが生み出す難儀の問題、貨幣（金銭）そのものが原因となって必然的に発生せざるをえない、神をも巻き込んだ神と人間との難儀な問題、この難儀な問題が、神と教祖との内的な信仰関係において、どのように救済されていく世界が展開されていくのか、という問題、すなわち「金神様御かけて立ちゆき」という問題についても、併せて考察を試みることにしたい。

※括弧内の引用表記は、大林浩治「「金銭遣い」の世における信心—金銭さしむけに関する帳面をもとにして—」（紀要『金光教学』第 57 号、2017 年）のものに合わせた。

# 「みな神様之銭 神様すえの為 御さしむけ」ということについての一考察

姫野教善

※括弧内の引用表記は、大林浩治「金銭遣い」の世における信心一金銭さしむけに関する帳面をもとにして一（紀要『金光教学』第57号、2017年）のものに合わせた。

今度、金光教教学研究所に新たに収納された資料のなかに、「みな神様之銭 神様すえの為 御さしむけ」（「金光大神直筆帳面2」の24丁裏。以下「帳面2」と略記）及び、「金神様おかけて立ち行き」（「金光大神手控え綴」〈旧名称「金光大神直筆帳面4」〉8丁表。以下「手控え綴」と略記）という神の言葉が、教祖によって書き留められている〈注1〉。その一端について考究を試みることにしたい。特に「みな神様之銭 神様すえの為 御さしむけ」（「帳面2」24丁裏）という神からの言葉が、一体、どのような意味をもつものとして理解されなければならないのか、という問題、この神の言葉が、一体、何のために発せられたのであろうか、貨幣(金銭)が、すべて「神様之銭」とは、一体、どういうことであらうか。その理由とは何か、という問題についてである。

安政4年(1857) 弟繁右衛門の家宅建築費用を、金神の頼みによって、教祖が心よく引き受けられたという、いわゆる「神の頼みはじめ」に端を発して、その後、次々と際限もなく教祖の金銭の支出が続いていく。

このことを大まかに羅列してみると、弟繁右衛門神勤のための児島修験からの許可金(児島ゆるし金)、児島尊瀧院への布教免許取得費用、尊瀧院所属の山伏らに免許状を取り上げられた一件での礼金諸費用、山伏や修験者等の無心の数々、山伏などに身をやつした生活困窮者らへの生活費、京都白川家への神職資格取得費用(金神社神主、金光河内補任費用)、吉田家への手続費用、藩の寺社奉行への献金、金神の宮建築に関する棟梁川崎元右衛門らの金銭横領問題、度重なる長男浅吉の博奕による借金返済、借金の利息、取立て費用、世話人への礼金等々その枚挙にいとまもない程である。

これらに支出された貨幣総額を現在の貨幣価値に換算することは、非常に困難

である。それは金、銀、銭、藩札、太政官札等が、年代的にも広範囲かつ雑多に入りまじり、しかもそれらの貨幣価値が、それぞれ異なっているからである。唯、ここで大まかに推測して言えば、それは億単位の貨幣(金銭)であったであろうことは、ほぼ間違いのないところであろう。

教祖の手元へのこのような巨額の貨幣(金銭)の源泉は、一体、何なのであろうか。その巨額の貨幣(金銭)の性格は、一体、どのようなものなのであろうか。

この問題については、もう一度、後程、考察するとして、ここで一口にして言えば、それは教祖広前における神への奉獻金である。それが神からの「さしむけ」(神のお下り)として授けられ、多方面において支出されたものである。

貨幣経済が発達し浸透しつつある徳川幕藩体制にしろ、それが極度に発展しつつある現代資本主義社会にしろ、そこでの貨幣(金銭)とは、そもそもどのようなものなのであろうか。

人間は太古の昔より、その生存のために自分の労働力を支出して、その結果得られる衣食住という労働生産物によって、その生命を維持してきた。労働生産物とは、人間労働力の対象化したものであり、そこに対象化された抽象的人間労働力が労働生産物の価値の実体であり、労働力の大きさ(社会的平均労働時間)がその価値の大きさとなる。

人間と人間との社会的関係は、物と物との社会的関係として、そして商品と商品との社会的関係として、さらには貨幣と貨幣との社会的関係として、資本と資本との社会的関係として表現されざるをえない。これ以外の表現形態は存在しえない。労働生産物が商品形態に転化し、その商品形態がさらに貨幣形態に転化し、その貨幣形態が資本形態に転化していくことになる。

貨幣の諸機能としては、価値尺度、流通手段、支払手段、蓄蔵貨幣、世界貨幣という5つの機能をもつものとして、そして資本としては、商業資本、産業資本、利子生み資本として、人間とその社会にとって絶大な権力を行使するようになる。

貨幣(金銭)なくしては、人間生存にとっての一切の生活必需品(衣食住)の購入が不可能となり、その生命までもが脅かされる。貨幣(金銭)なくしては、人間はその生命の維持が困難とならざるをえない。そのような意味では、貨幣(金銭)は人間の生命と同程度の比重をもつ価値物として、非常に貴重なものといわざるをえない。ここから、貨幣(金銭)は、一面、人間の生存にとって必要欠くべからざるモノである。それと同時に、また人間は、この貨幣(金銭)のもたらす色々な

難儀に呻吟し苦悩し続ける。貨幣(金銭)は、人間の生存にとって絶対的に必要欠くべからざるモノである。と同時に、人間は、この貨幣(金銭)によって支配され従属せしめられる。貨幣(金銭)は、人間の生存にとって無くてはならない絶対的有用物である。と同時に人間の首をぎりぎり締めつけ、時にはその命さえも奪う頸木として作用する。

貨幣(金銭)は、まさに絶大なる権力をもった万能の神として(神ではない)、その物神性、その呪物的性格を如何なく発揮する。弟繁右衛門が屋敷建築費用に困窮したのも、棟梁川崎らの金銭の使い込みや横領も、そして、浅吉の博奕による借金返済という、神をも巻き込んだ教祖親子の苦悩も、すべて貨幣(金銭)を源泉とする難儀であり、それからの例外ではありえない。

さらには、IT(情報技術)が発達しつつある現代資本主義社会においては、貨幣で貨幣を売買(円売ドル買、円買ドル売等)することによって、貨幣(金銭)が瞬時に国境を越えて世界中を飛び廻り、世界を支配する。貨幣(金銭)の、人間を疎外し、呪縛し、抑圧し、抹殺するその魔性力は、驚異的なものとして発達しつつある。これが、貨幣経済のまぎれもない事実であり、しかも誰一人として否定することの出来ない現実そのものにほかならない。

しかし、この現実とは断じてその本質ではない。この現実とは、貨幣(金銭)の現象形態であり、現実とは現実であっても、それは現象にすぎないのであって、貨幣(金銭)そのものの本質であるとは決して言いえない。

このように、貨幣(金銭)が人間生存にとって絶対的に必要欠くべからざるモノであると同時に、またそれ故に、その反面、人間を疎外し抑圧し支配し従属せしめ、人間をして苦しめ抜き、時にはその生命をも奪うこの非情かつ冷酷な魔性力をもつ貨幣(金銭)を、なぜ神は、「みな神様之銭 神様すえの為 御さしむけ」と仰せられたのであろうか。この神の言葉の真意は、一体、何なのであろうか。

前者の現実社会における貨幣(金銭)のもつ物神性と、後者の神の言葉、すなわち「みな神様之銭 神様すえの為 御さしむけ」との距離は、天と地ほどの差があり、その視点は、180度颠倒した異質の観点にほかならない。この問題を、一体、どのように理解すべきなのであろうか。はたして、この二つの一見相反し矛盾するような見解に対する整合的理解の道は、存在するのであろうか。

この問題を考究するに際しての問題点の第一は、「みな神様之銭」という場合の「みな」という神の言葉そのものである。

たしかに、金神広前に氏子が真心からお供えした貨幣(金銭)は、奉獻金として「みな」「神様之錢」という論理が成立しうる。したがって、その神への奉獻金を、「みな神様之錢」(神様からのお下がり)として、神の指示に従って支出する時、その支出された「神様之錢」は、神からの「さしむけ」られた貨幣(金銭)という性格を帯びる。

それでは、教祖広前に奉獻金としてお供えにならなかった貨幣(金銭)は、「神様之錢」と規定されえないのであろうか。奉獻金以外の貨幣(金銭)は「みな」の範囲の規定外の貨幣(金銭)なのであろうか。したがって、「みな神様之錢」と規定されえない貨幣(金銭)の支出は、神からの「さしむけ」とは規定されえない貨幣(金銭)なのであろうか。

人間は自分が生きている。そして自分の生命と一体となっている人間労働力を支出して、その代価としての貨幣(金銭)を受け取れば、それで済むというような問題ではない。

人間の労働力は、今日一日の労働によって消耗され尽くす。人間は今日一日の労働力の支出どころか、明日も明後日も、10年後も50年後も働き続けられなければならない。人間労働力の支出が、明日も明後日も、10年後も、50年後も不断に支出され継続されうるためには、その労働力と結びついた人間の生命が、今日一日の生命ということではなく、明日も明後日も、10年後も、50年後も繰り返し新たに再生産され続けられなければならない。人間の生命を再生産し、それと不可分離な人間労働力の再生産のためには、人間の生存にとって必要不可欠な生活必需品(衣食住)が、毎日、受け取った労働力の対価としての貨幣(金銭)によって購入される必要がある。

人間は自分が生きているのであり、自分が働いて得た貨幣(金銭)は、当然、自分の所有物であり、その消費は、自分の判断で勝手に決定しうるものと信じ、そのように行動する。この信念は、世人の頭脳の中では確固たるものとして、ピクとも動揺するものではない。だがはたして、このような教祖広前からの奉獻金以外の貨幣(金銭)は、「みな神様之錢」という規定以外のそれなのであろうか。そのような貨幣(金銭)は、同じ貨幣であっても「みな」の範疇以外の貨幣(金銭)なのであろうか。

事物には、現象と本質とが存在する。「水」という物資の本質は、その現象形態からは全く想像すらでき難い、似ても似つかない「H<sub>2</sub>O」(水素2原子と酸素

1原子との化合物)である。この「水」の本質は、水そのものを舌で味わってみても匂いを嗅いでみても、決して解明され理解されることは不可能である。

また、「太陽」は東から昇り西へと沈む。これが「太陽」という天体の現象形態である。これが眼に映ずる現象であり現実にはほかならない。しかし、この現象は本質そのものではない。この「太陽」が東から昇り西へと沈むという現象形態を本質と見誤ると、それは天動説という謬説に陥ることになる。「太陽」という天体が東から昇り西へと沈むという現象形態の本質は、実は、地球自体が自転しながら、「太陽」の周りを一定の法則に従って回転しているという、地動説にほかならないということ。これこそが、現象形態の背後に隠蔽されている本質そのものにほかならない。事物の現象形態にのみ眼を奪われていると、その本質の分析・解明を見落とすことになる。

事物の現象形態には、その本質を隠蔽するところの様々な夾雑物や偶然的要素が混在している。自然科学においては、それら夾雑物や偶然的要素を捨象するための様々な実験分析装置、顕微鏡、試薬、優れた天体観測装置などが存在する。ところが、社会科学においては、そのような実験装置は、全く存在しえない。唯一つ、人間の頭脳による抽象力によって、これら夾雑物や偶然的要素を科学的に捨象する以外に、本質を発見する方法は存在しえない。事物の現象形態には様々な夾雑物、偶然的要素が混在し、複雑な形態をもって出現する。これら様々な夾雑物、偶然的要素を人間抽象力によって、科学的に一つ一つ捨象することによって、複雑なものから最も単純なものへ、不純なものから最も純粋なものへと辿り着く。これが事物の本質にほかならない。人間の科学的抽象力による現象形態が包含する夾雑物や偶然的要素が捨象され抽象化される捨象・抽象化過程の結果、獲得されたもの、これが、すなわち事物の本質にほかならない。複雑なものから単純なものへ、不純なものから純粋なものへという、下向・捨象・抽象化過程の終着点において発見されるもの、これが、現象形態の背後に隠蔽されていたその事物の本質にほかならない。

だがしかし、この最早、これ以上の捨象・抽象化は不可能であるという終着点で発見され把握されたところの本質は、決してその事物の全体的実像を反映したものとは、決して断じえない。なぜならば、それは、現象形態から様々な夾雑物や偶然的要素が捨象化され抽象化されているからである。したがって、事物の全体的実像を把握するためには、先に捨象された夾雑物や偶然的要素が、元通り埋

め戻される復元作業が必要となる。下向・捨象・抽象化の終着点からの上向・復元・総合化過程によって、再び元の分析の出発点に立ち帰った時、はじめてこの事物の全体的実像の理解が可能となる。人間の科学的抽象力による複雑なものから単純なものへ、不純なものから純粋なものへという下向・捨象・抽象化過程と、今度は、その捨象物を埋めもどす上向・復元・総合化過程という、二つの道の統合が成立し完了する時、その事物の全体的実像が把握され理解されうることになる。

人間は自分の力で「生きている」。人間は自分の力で労働し、その対価としての賃金（金銭）を受け取る。したがって、その賃金（金銭）は誰から貰ったものでもなく、自己の正当な所有物として、その使用は自分の勝手次第である。何時でも好きな時に好きなモノを好きなだけ購入できる。これが貨幣（金銭）についての現象形態にほかならない。

だがしかし、この貨幣（金銭）についてもその現象形態の背後に隠蔽されている本質が解明される時、その様相は180度逆転する。天動説から地動説というコペルニクスの転回が出現する。

その重大かつ決定的視点は、人間は自分で「生きている」のではない。神によって「生かされている」ということ。「生きている」ということは現象形態である。「生きている」ということの本質は、「生かされている」ということである。人間の生命が、神によって授けられ「生かされている」ものである以上、その人間の生命と相即不離な、そしてそれを源泉とする人間労働力も、これまた神からの授かり物、賜物にほかならない。そして、その神の賜物としての人間労働力の支出の対価としての貨幣（賃金）も、やはり同様に神からの授かり物、賜物以外の何ものでもありえない。これもまた、理の当然のことであり、その必然的結果にほかならない。このように、賃金という貨幣（金銭）が、神からの恩恵物であり賜物であるという本質が解明される時、神が宣言される「みな神様之銭」という本質が解明されたことになる。その真意は、教祖広前における奉獻金は勿論のこと、それ以外のすべての貨幣（金銭）が、「みな神様之銭」という本質が了解され、納得されうることになる、と断じて差し支えない。

貨幣経済についても同様のことが言いうる。貨幣経済とは、人間と人間との社会的関係が、物と物との社会的関係として、そして、その関係は商品と商品との社会的関係として、さらには、貨幣と貨幣との社会的関係として、資本と資本と

の社会的関係として現象せざるをえない、という社会にほかならない。ここではモノによって人間が、疎外され抑圧され支配され従属せしめられる。

貨幣(金銭)は、人間の生存にとって絶対的に必要不可欠なモノであり、この貨幣(金銭)というモノが皆無となれば、人間の生命・生存が脅かされる。それほどまでに最重要かつ貴重な価値物にほかならない。もっとも貨幣(金銭)と人間生命とどちらがより重要なものであるか、と問えば、それは、もちろん人間生命の方に決まっていることは、その議論を待つまでもないところではあるにもかかわらず、それほどまでに貴重な価値物であるが故に、反面、人間はこの貨幣(金銭)によって、様々な難儀な問題を背負わされ苦悩し続ける。貨幣(金銭)は人間を奴隷化し、人間性を無視し喪失せしめる。人間の手足を縛り、首には首枷が巻かれぐいぐい締めつけられる。貨幣(金銭)は人間の生命・生存にとって必要欠くべからざる最高の価値物であるにもかかわらず、その貨幣(金銭)が、人間の生命をも奪う。そこには貨幣(金銭)の生み出す様々な難儀に呻吟する多数の貧窮者の群れが横たわっている。さらに貨幣(金銭)が資本に転化することによって、この傾向はますます拡大し、強化し、深刻化していく。

生きた人間労働力が生み出した労働生産物というモノが、商品に転化する。そして物と物との交換過程のなかから貨幣が生み出される。したがって、貨幣(金銭)も、また商品の一形態にほかならない。換言すれば、労働生産物が商品に転化し、商品が貨幣に転化し、さらには貨幣が資本に転化する。商品と商品とが、貨幣を媒介として流通することが基本的な貨幣経済社会においては、人間と人間との社会的関係が、労働生産物と労働生産物との社会的関係によって、そして商品と商品との社会的関係によって、さらには貨幣と貨幣との社会的関係によって、資本と資本との社会的関係によって、完全に覆い尽くされ、二重、三重に隠蔽され尽くされている。これに信用論(商業信用と銀行信用)が絡んで来ると、貨幣の本質はより深く完全に隠蔽され、貨幣の現象形態の複雑化と不純化はその強度をますます増大せしめる。そこでは人間性は侵害され、人間は消去され、疎外され、支配され、従属せしめられている。人間の尊厳はモノによって否定され、人間は、貨幣(金銭)という手枷、足枷、首枷によって、ぎりぎり締めつけられ、貨幣(金銭)のために自分の命どころか、他人の命をも奪いかねない。貨幣(金銭)によって殺人事件が起こり、戦争が勃発する。貨幣(金銭)は最高の価値物として、思う存分その物神性を発揮する。これが貨幣経済というものの現象形態にほかな

らない。この現象形態を人間の科学的抽象力によって、複雑なものから単純なものへ、不純なものから純粋なものへと捨象し下向する、いわゆる下向・捨象・抽象化過程によって、貨幣経済の本質が発見される。ここで重要なことは、それでは、そこで発見された貨幣経済の本質とは、一体、何か、ということ。

貨幣経済の本質とは、まさに生きた人間と生きた人間との社会的関係そのものにほかならない。それは、まさにその生きた人間の支出する労働力と生きた人間の支出する労働力との社会的関係そのものにほかならない。

資本の原拠は貨幣であり、貨幣の原拠は商品である。そして、その商品の原拠は人間労働生産物であり、人間労働生産物の最終的原拠は、人間労働力であり、人間そのものであり、人間の生命そのものにほかならない。それは、けだし、人間の生命と相即不離な関係において固く結びついている人間労働力は、当然のことながら、その源泉としての人間の生命が消滅する時、これまた人間労働力も自然消滅せざるをえないからである。

別言すれば、「人間生命」→「人間労働力の支出」→「労働生産物」→「商品」→「貨幣」→「資本」という一連の必然的転化形態のすべての原拠は「人間生命」である。これら一連の転化形態の本質は、「人間生命」以外には存在しえない。それでは、この「人間生命」そのものの本源・本質は、一体、何であろうか。これこそが、最大の問題点にほかならない。こここのところを追究することによって、神との関係性が浮かび上がらざるをえない。

ここで重要なことは、貨幣経済の本質が、生きた人間と生きた人間との社会的関係以外の何ものでもありえない、ということ。さらに、この本質が発見され、理解されたからといって、現実の貨幣経済の現象には何らの変化も見られないし、何らの変動も起こらない、ということである。貨幣経済体制が持続される限り、その体制は、人間の生存にとって絶対的に必要不可欠なものでありながらも、他面、人間は、貨幣経済体制ならびにそこでの貨幣(金銭)の頸木に締めつけられ苦悩するという難儀の事態には、何らの変化も生じえない。否、むしろ、資本主義社会が高度化すればするほど、貨幣経済体制並びに貨幣(金銭)というモノによる人間疎外・呪縛・支配・従属は、ますます拡大され強化されざるをえない。

さらに重要なことは、そうだからと言って、本質を発見し理解するという捨象・抽象化の作業が、全く無駄であり、無意味であるということには、断じてならない、ということ。否、むしろその逆である。貨幣経済体制の本質が、生きた人

間と生きた人間との社会的関係、人間の生命と人間の生命との社会的関係ということが、神との関係において、どのようなものとしてあらしめられているのであろうか。

人間が「生きている」ということは、現象形態である。「生きている」という現象形態の本質は、まさに神によって「生かされている」ということである。その「生かされている」人間生命そのものが、人間生命と分ち難く固く結びついている人間労働力（つまり、人間生命の再生産がなければ、それと固く結びついている人間労働力の再生産も、これまた決してありえないという人間労働力）そのものが、そして、その人間労働力が生み出した労働生産物、その労働生産物の転化形態としての商品、さらには商品の転化形態としての貨幣、貨幣の転化形態としての資本それ自体、人間の生命が、神からの授かり物であり賜物である、ということ論拠とし原拠として、人間労働力も、労働生産物も、商品も、貨幣も、資本も、これらすべてが、神からの授かり物であり、賜物であるというその本質が、抽出され発見されることにおいて、人間をはじめ、この人間との必然的な一連の関係におけるこれらすべての事物と神との関係性が白日のもとに暴露され、明確に判然とする。貨幣経済の本質が発見されることによって、遡及的に、神と人間生命、神と人間労働力、神と労働生産物、神と商品、神と貨幣(金銭)、神と資本との関係性が暴露されてくる。

ここにこそ、現象形態を人間の科学的抽象力によって、現象の奥底深く隠蔽されている事物の本質が、抽出され発見され、そして理解されうるという、極めて重要な理論的意義が存在している、と言われなければならない。

さらに、最も重要な問題、それは究極的には、「人間生命」→「人間労働力」→「労働生産物」→「商品」→「貨幣(金銭)」→「資本」という一連の必然的関連性の源泉としての「人間」そのものが、そして「人間生命」そのものが、神から授けられたものであり、神からの賜物であるということ、そしてこの一連の必然的関連性の本源としての「人間生命」が、これらすべての本質にほかならないという、その本質そのものの発見・解明によって、貨幣(金銭)の本質は、「みな神様之銭」という貨幣(金銭)の本質が解明されうるということ。すなわち「みな神様之銭」という神からの言葉の真意が、ここにおいて理解され了解されうる、ということである。

このような深き神の願いの込められた「みな神様之銭」が、教祖の末の幸せの

ため（そして人間全体のそれとして）、神が「御さしむけ」になったという、この「みな神様之銭 神様すえの為 御さしむけ」という神の言葉が含意する限りなき深度と広大なる御神意の理解が、少しでも可能となる、と言わなければならない。

「みな神様之銭 神様すえの為 御さしむけ」ということによって、貨幣(金銭)並びに貨幣経済の生み出す数々の人間の難儀が、現実社会の現象形態には何ら変化が生じないにもかかわらず、「金神様おかけて立ち行き」（「手控え綴」8丁表）という、奇跡的な救済世界が出現するということである。金神広前に氏子が真心からお供えした貨幣(金銭)はもちろんのこと、それ以外の全ての貨幣(金銭)も、「みな神様之銭 神様すえの為 御さしむけ」として理解するということ、そしてそのように心底から信じ切り、有難く頂き切り、お礼申し上げるということによって、貨幣(金銭)が生み出す難儀が救済に転化するという救済世界の出現、これが「金神様おかけて立ち行き」という信仰による奇跡にほかならない。この貨幣(金銭)によって生ずる人間の難儀からの神による救済の問題は、病気、災難からの神による救済の問題と同等の比重を持つものとして、重視されなければならない重要な問題にほかならない。

この貨幣(金銭)が生み出す人間の難儀の問題が、教祖と神との内的な信仰関係において、そこからの救済の道の存在が教示された別の帳面、これが「金乃神様金子御さしむけ覚帳」（旧称「金光大神直筆帳面1」。以下、「金子覚帳」と略記）、「帳面2」、「手控え綴」にほかならない。これまでの「金光大神御覚書」（以下「覚書」と略記）、「お知らせ事覚帳」（以下「覚帳」と略記）とは別に、金銭出納帳として、貨幣(金銭)の収支を、神の命によって克明かつ正確に記帳し計算することによって、教祖と神との内的信仰関係において、貨幣(金銭)のもつ物神性、それが生み出す様々な難儀の問題について、現実の社会体制の現実的現象形態には何らの変化も構造的変動も見られないにもかかわらず、それとは別の道としての救済の世界が、神によって指し示された特別の帳面にほかならない。

最後に結論としてもう一言。

これまでの「覚書」、「覚帳」が、教祖と神との「お知らせ」という形態を通しての「会話」であり、神からの信心のあり様、その指針についての教示の書、信仰の書であるとするならば、この別の帳、すなわち「金子覚帳」、「帳面2」、「手控え綴」は、「覚書」「覚帳」には記載されていない貨幣(金銭)問題だけを、神の

命によって詳細に記帳した特別の帳面として、「覚書」「覚帳」と同格・同等な重要性をもつものとして重要視されなければならない。

「みな神様之銭 神様すえの為 御さしむけ」という神の言葉は、特に「みな神様之銭」というそれは、これまでの「覚書」「覚帳」においては見ることの出来ない神からの言葉であり「お知らせ」である。これは新しい神からの教示による信仰の言葉・記述である、と云いうるであろう。「御さしむけ」という言葉についても、「覚書」「覚帳」では、物・人・教祖を神が「さしむける」という表現が見られたとしても、貨幣(金銭)そのものを具体的に指名して、これを「御さしむけ」という神の言葉が、これほどまでに明確に記載された初めての帳面として、その信仰的意義は、高く評価されなければならない(注2)。

かくして、この「みな神様之銭 神様すえの為 御さしむけ」ということによって、「金神様おかけて立ち行き」という、貨幣(金銭)が生み出す神と人間との難儀の問題からの神と教祖との内的信仰関係における奇跡的な救済世界が出現するということが、このように明確に明言されているのも、これまでの「覚書」「覚帳」には見られない神からの言葉が記載された帳面である、と言っても過言ではない。

「覚書」「覚帳」における様々な人間の病気・災難が、教祖と神との信仰の内的な相互的・照応関係の進展とともに、奇跡的に救済される世界が出現してきた。それと同様に、この帳面においては、「覚書」「覚帳」には記載されていない貨幣(金銭)が生み出す人間の難儀の問題が、現実社会が何ら変化されないにもかかわらず、その現実社会のあり様、その現象形態とは全く異質の別の道、すなわち信仰のあり様による別の道によって、救済されていく「みな神様之銭 神様すえの為 御さしむけ」による「金神様おかけて立ち行き」という、神のおかげの論理が明確に記載されている特別の帳面である、と断じて差し支えないであろう。

神をも巻き込んだ神と人間との貨幣(金銭)が生み出す難儀の問題が、神と教祖との信仰的内的関係において、奇跡的な救済世界が出現するという、この特別な帳面が、「覚書」「覚帳」と同等な位置づけにおける新たなる信仰の帳面であり、貨幣(金銭)の面から見た難儀救済という新たなる信仰の帳面であるということ。そして、これは、「覚書」「覚帳」に記載されている以上の貨幣(金銭)の問題のみを、具体的に神の命によって記述することによって、「覚書」「覚帳」を貨幣(金銭)の面において補強し補完する特別の帳面として、その信仰的意義は大きく評

価されなければならない。

貨幣(金銭)が生み出す神をも巻き込んだ神と教祖との難儀からの救済という事蹟、教祖における、「金神様おかけて立ち行き」という、貨幣(金銭)が必然化する難儀からの救済体験が、教祖自身の信仰のさらなる深化・発展要因として、このことが、さらにまた神と教祖との内的信仰関係をして、より一層進化・発展せしめた特別の帳面として、その信仰的意義は、高く評価されなければならない、ということである。

(以上)

〈注1〉 本稿の執筆に際して参考にした文献は以下の諸論文である。大林浩治「「金銭遣い」の世における信心—金銭さしむけに関する帳面をもとにして—」紀要『金光教学』第57号、2017年。岩崎繁之「金光宅吉による「お知らせ事覚帳」の筆写について」紀要『金光教学』第56号、2016年。

〈注2〉 貨幣(金銭)について、これを神が「さしむける」という神の言葉が記載されているのは、「覚帳」においては、次の4か所のように思われる(「覚書」においては、これを認めることは困難である)。

- ①「正銭五貫文、家の重りにお差し向け」(「覚帳」16-13-5『金光教教典』99頁)
- ②「一つ、浅尾金光正神、銀子ことにまいり。お伺い。奉還いたし金子此方へよこし、その間の借りかえ願ひ申し候。神様お差し向け」(「覚帳」18-11、『金光教教典』112頁)。
- ③「一つ、備前札五十目、うえ歳暮。神様差し向け」(「覚帳」18-26、同116頁)。
- ④「正神、衣類、質のこと、元利六円の余、一度に受ければ勝手よしと申し、願ひ。お差し向け。」(「覚帳」20-5、同122頁)。